



針生 悦子 教授

Etsuko HARYU

研究分野：発達心理学、言語心理学

研究内容：新しい言語を学ぶのに、大人なら、ことばで説明してもらうことができます。しかし、最初の言語を身につけようとしている子ども（赤ちゃん）は、そういうわけには行きません。子どものことばの学習では何が問題になり、子どもはそれをどのように乗り越えているのかについて研究しています。

1995年 青山学院大学文学部 専任講師  
1998年 同上 助教授  
2003年 東京大学大学院教育学研究科 助教授  
2007年 名称変更により 准教授

2015年 東京大学大学院教育学研究科 教授

## 子どもの言語学習、大人の言語学習

### 子どもは言語学習が得意？

多くの大人が、早くから始めたほうが言語はよく学習できる、と思っています。そのためか、学校での英語学習の開始時期もどんどん早められています。実際に、英語以外を母語とする人で、アメリカに居住している人の英語レベルを調べた研究では、通じる言語を使うということでは、何歳のときにアメリカに来たかによる差はほとんどなかったものの、文法の細かなところ（冠詞、三人称単数現在のs、過去形……）では、子どものうちにアメリカに移住した人の方が高いレベルに達していたことが報告されています。このようなデータを見ると、確かに、言語を完璧な水準で身につけるためには、できるだけ早く学習を開始するほうが良さそうに思われます。

### 子どもの第二言語学習過程

それでは、子どもが母語以外の言語を習得していくときの様子はどうか？ たとえば、家族の都合で、自分の母語とは異なる言語が話されている国に行き、現地の幼稚園に通うようになった子どもが、“やすやすと” 現地の言語を話せるようになった、という話はよく耳にするような気がします。ただ、そのようにして現地の言語に馴染んでいるように見える子どもでも、よく調べてみると、語彙も文法もモノリンガルの同年齢の子どものレベルに達していないことは珍しくありません。文法なら特にどこが弱いと言えば、単語をつなげて文をつくるための接着剤のような部分で、これは、上の研究で“年齢がいったからその言語に触れたのでは獲得が難しい”と指摘されたところとも重なります。

### 子どもの母語獲得

文を作るための接着剤と言えば、日本語では、助詞や助動詞、活用語尾、ということになるでしょうか。そういった部分が抜けた発話を、母語獲得過程の子どもも初めのころは、よくします。「ニャンニャン イタ」「ママ ガッコウ イク」など、文字数を節約するため電報で使われた文の形に似ていることから、電文体発話と呼ばれるほどです。

このようなところから、助詞や冠詞など文をつくるための接着剤のような部分は、子どもにとっても学習が難しいのではないかと長いあいだ考えられてきました。しかし、そこだけ抜かず、ということは、何かわかっていることの裏返しかもしれません。実際、最近になって、自分では冠詞を抜かした発話をしている子どもも、大人がわざと冠詞を抜かして話す理解しづらいことがわかってきました。私の研究室でも、やっといくつか単語が言えるようになったばかりの時期の子どもが、実は、助詞を手がかりにして、“名詞”のようなことばの種類を見分けていることがわかってきました。

こうしてみると、子どもの言語学習は、早くに始まるというだけでなく、大人の思っているような順序や状況では起こっていないことがわかります。時期をマネただけでは外国語学習の成果にはつながらないのかもしれない。